

「葦」第45号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

副院長・看護部長 大名 美記子

本号にも看護研究成果として平成27年2月14日に院内で発表された数多くの臨床研究や実践報告が掲載される事を大変喜ばしく思います。多忙な看護活動に併せ、文献検索から始まり、論文まとめまでに多大な労力と時間をかけて取り組んだこれらの成果が、未来の臨床実践に還元される論文であることを願います。

昨今の看護学における看護研究は、教育・研究・臨床をつなぐ展開で、大学と施設との共同研究や他分野と連携・協働した学際的研究が増えています。

「葦」前号（第42号）巻頭言に看護部の「看護研究・実践報告」発展には看護研究活動を効果的に支援する体制整備の必要性から大学病院としての強みを活かし、附属病院看護部と看護学科との共同（コラボレーション）の必要性を述べています。これには看護研究が義務化されていること（キャリア開発プラン）や、研究のための知識や能力の不足などが影響して研究活動に対する看護師の負担感が大きく、時にはやらされ感から「研究のための研究に終わってしまわないか」と、危惧されているからです。

この課題解決に看護実践・キャリア支援センターによる共同研究のコーディネートが大きな支援となっています。看護実践・キャリア支援センターは平成26年4月に地域の医療に貢献する看護職の育成を目的に開設され、これまでに看護基礎教育、研究支援・実践、キャリア支援活動など、看護学科との連携が多く得られています。その中でも院内看護研究・看護実践においては教育支援室との意見交換をはじめ、看護学科教員の報告会への参加促進を得て教員の院内看護研究・実践報告における支援体制の構築に至っています。今後、このシステムの充実が図れ、看護師の研究活動の苦労は研究過程を経て得られた新知見への喜びや達成感・充実感につながることを期待します。

日本看護協会『看護者の倫理綱領』に、看護者は、研究や実践を通して、専門的知識・技術の創造と開発に努め、看護学の発展に寄与する。看護者は、常に、研究や実践等により、得られた最新の知見を活用して看護を実践するとともに、より質の高い看護が提供できるよう、新たな専門的知識・技術の開発に最善を尽くす。開発された専門的知識・技術は蓄積され、将来の看護の発展に貢献する。すなわち、看護者は、研究や実践に基づき、看護の中核となる専門

的知識・技術の創造と開発を行い 看護学の発展に寄与する責任を担っていると明確に述べられています。

附属病院では専門看護師や認定看護師、看護大学卒業や修士課程を修了した看護師が次々と育っており、臨床現場に多くの刺激をもたらしてくれています。今後、臨床看護の質向上をめざし、附属病院看護部と医学部看護学科が協働し、支援体制の充実が図れることを望んでいます。最後に、看護部長就任時に3年後のあるべき姿として掲げた「それぞれがキャリアパスを描き、自己研鑽や研究に主体的に取り組んでいる」については、今後の活動に期待し、個々の成長を楽しみにしています。